

2011年度 政治経済学

小倉利丸

ogura@eco.u-toyama.ac.jp *

2011年10月27日

4 フェティズムと貨幣の機能

4.1 概観

今回の講義では、第一回で示した講義スケジュールのなかの「貨幣」の項目について、次のように変更して話をします。

1. フェティズム（「物神性」と表記していた項目）
2. 価格と価値尺度
3. 流通手段
4. 貨幣としての貨幣
5. 金貨幣の限界と市場経済の不安定性

4.1.1 市場の欲望と市場外の欲望

商品も貨幣も日常的な市場経済の取引で私たち自身が接しているもっとも身近な存在である。私たちは誰でも貨幣（生活のなかでは「お金」と呼ばれることの方が多いただろう）を使ったこともあるし、商品を買ったこともある。（時には「売る」経験も持ったことがあるだろう）だから、自分たちはこれらについてよく知っているつもりになっているし、今更あれこれ議論される必要がないものだと思うのも当然である。しかし、マルクスは、この日常的な当たり前のものをあえて私たちの前に持ち出して、「本当にあなたたちは、これが何なのか、解っているのだろうか？」と問いかけたのである。

前回に述べたように、貨幣は物々交換の不便さを解決するための便宜的な手段ではない。貨幣は単に自分が欲しい商品を得るための手段以上の「意味」を持っている。あるいは、商品についても、それは単なる「有用なモノ」として市場に供給されているというだけで説明がつくものではない。たとえば、友達が持っているiPhoneと店で売っているiPhoneは同じモノではあっても、あなたの欲望の発動の仕組みは同じではない。店にある商品は、あなたのものになる可能性をもつものとしてあなたの前にある。あなたの懐次第だが、欲しいと思えば手に入れられる可能性をもつものだ。500万円の車であれ5000万円の家であれ、あなたは

* 携帯 070-5553-5495

「欲しい」と思えば獲得することが可能なものとして、あなたの前にある。もちろん、あなたがどれだけの貨幣を所有しているかに依存する。ポケットに100円玉しかなくても車を欲しいと思い、新しい家に住みたいと思うだけでなく、これらを得るチャンスを市場は与えているというメッセージを、あなたは市場から常に受け取る。このことは、友人や誰かの所有物を羨ましいとか自分も同じものが欲しいと思う感情とは似ているのだが、本質的に異なるものだ。それは、獲得するのに必要な貨幣さえ手に入れれば、自分のものにできる可能性が常にあることに基づいた欲望なのである。

私たちには実感しづらいのだが、市場経済は私たちの欲望の形を確実に変容させてきた。たとえば、レストランで食事をする場合と親しい友人に招待された友人宅で晩ご飯をご馳走される場合を比較してみよう。友人宅であなたは、レストランで料理を注文するように晩ご飯の注文をすることはしない。出された料理を食べる。友人宅でのあなたはメニューから自分の食べたい料理を選択するわけではない。友人が用意してくれた食事を一緒に食べるが普通だろう。だからとってレストランのように、選択肢のない食事が不自由であるとか、レストランにくらべて自分の欲望を充足できない食事だと思うだろうか。多様な選択肢から自分の望むものを選ぶ自由（市場経済は、このような「自由」をもっとも重視するが）だけが自由なのではない。友人と一緒に友人が振る舞ってくれた食事をとるときに味わう喜びは、レストランで食事をとる場合にはない別の意味での精神的自由を味わうことかもしれないのだ。このように、市場に参加した人々が発動する欲望と市場の外で発動される欲望とは同じではない。食事は単なる栄養補給ではなく、食事をめぐる環境（社会関係や人間関係）と不可分である。言い換えれば、文化が密接に関与する。文化には経済的な意味での価値とは異なる文化的な価値があり、この価値が商品としての食事、友人との食事の意味に深く影響するし、逆に、市場が大きな影響力をもつような経済が広がれば、それが文化的な価値に影響をもたらす。文化は論理的に説明することが困難な要因であるがゆえに、理屈抜きで受け入れたり拒否したり、好き嫌いという感情に作用する。

4.2 フェティシズム

『資本論』では、価値形態論に続いて「商品のフェティッシュ的性格とその秘密」と呼ばれる一節を設けている。マルクスは商品は「謎めいている」という。その「謎」とは何なのか？この「謎」を説明するために、マルクスはまず最初に謎とはいえないこと、つまり、誰にでも自明といえることを次のように述べている。

商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは生まれず、また価値規定の内容からも生まれない。というのは、第一に、有用な労働または生産的な活動がどれほど多様であろうとも、それらが人間の有機組織の機能であり、そのような機能のひとつひとつが、その内容と形態が何であれ、本質的に人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官等々の支出であることは生理学的事実だからである。第二に、価値の大きさを規定する根拠、すなわち前に述べた支出の時間持続または労働の量はどうかといえ、その量は労働の質から区別されることが感覚的にもわかる。そのような社会状態においても、生活手段の生産に要する労働時間は、発展段階の違いに応じて一様ではないにしても、人びとの関心を引きつけずにはいない。最後に、人びとが何らかの仕方ではたがいのために労働するようになると、ただちに彼らの労働もまた社会的な形態をおびるようになる。

ここで言う「使用価値」とは、モノそのものの自明な有用性である。この有用性を生み出す具体的な労働そのものは、使用価値を形成するために必要な労働時間についても、人びとはモノを生み出す上で必要とされる人間労働の支出（労働時間として数量化する労働の側面）として直感的に理解できるということを前提にしている。私は、このマルクスが自明だとみなした事柄についても自明だとは考えていないが、今、この点には

深入りしない。^{*1}では、マルクスは、何が「謎」だというのか。

商品形態の秘密にみちたところは単純に次のことにある。すなわち、商品形態は人間自身の労働の社会的性格を、あたかもそれぞれの労働生産物自身の対象的性格であるかのように、つまりはこれら種々の物体のうまれつきそなわった社会的属性であるかのように彼らの頭の中に反映させる。(略)このような位置の取り違いによって、労働生産物は商品になる。(略)商品形態と、商品形態が表現される労働生産物の価値関係は、生産物の物理的性質とも、物理的性質から生まれる物的関係ともまったく関係がない。それはもっぱら人間たち自身の特定の社会的関係であって、それがここでは人間にとって物と物との関係というファンタズゴマリー^{*2}のような形態をうけとるのである。したがってそれと似たものを見つけ出すためには、宗教的世界のおぼろげな領域へと逃避しなければなるまい。この領域では、人間の脳髄の産物^{*3}は、それ自身の生命を与えられて、相互に関係し、また人間とも関係する自立的な姿をそなえているかのように見える。商品世界では人間の手の産物がそれと同じふるまいをする。私はこれをフェティシズムと名づける。フェティシズムは、労働生産物が商品として生産されるとたちまち生産物に貼り付き、したがって商品生産から分離できなくなる。

労働生産物は生まれつき商品なのではない、というのがマルクスの労働と商品との間にある差異の認識である。友人を自宅に招いて作る料理は商品にはならない労働生産物であるが、同じ料理がレストランで出されれば、この労働生産物は商品となる。商品になるかならないかは、この労働生産物がどのような社会関係のなかに置かれるのかで決まる。社会関係とは、人と人との関係に他ならないが、この関係が労働生産物に商品という形態を与え、それと同時に商品に固有の使用価値と価値という要因を与えることになる。

市場経済のなかで、人びとは「この商品にはこれこれの使用価値がある」とか「この商品にはこれだけの価値(値打ち)がある」といった言い方をする。「この商品には」という言い方が端的に示しているように、あたかも商品そのものに、歴史も社会も超越して、本質的に備わった属性として使用価値や価値が存在するかのような見方をする。マルクスは、こうした見方は、商品という形態を与えられた労働生産物に本来的に備わっているものではなくて、そのモノを商品として売買するような社会関係のなかで始めて与えられるものでしかない、と指摘した。にもかかわらず、市場で取引する人びとが、商品の価値を労働生産物に固有の価値であるとみなす取り違えをし、この物そのものが本来的に持つ価値であると感じることをフェティシズムと呼んだのである。フェティシズムは、日本語では「物神崇拜」とも訳される。フェティシズムとは、物そのものには本来ないはずの性質を人が錯覚してその物に本来的に備わっている性質とみなして崇める態度を意味する。十字架や仏像を神聖な物とみなしたり(単なる金属や木材の彫刻に過ぎないのだが)、人間が身につける衣服などに性的な欲望を抱く(単なる織物に過ぎないのだが)といった性向にはフェティシズムと呼んでいいような人間の性格が現れている。性的フェティシズムはフロイトが注目し、現代思想にも大きな影響を及ぼすようになるが、それが特殊な病的な現象として現れれば、医学や心理学の対象になるだろうが、市場経済に参入する

^{*1} たたとえば、自動車が移動のための輸送機械であり、内燃機関を動力として路上を軌道を用いずに走行する装置であるという意味では、機械工学的に曖昧なところはない。しかし、なぜ自動車がそのようなデザインをしているのか、はこうした自然科学のアプローチでは説明がつかない。そこには使用価値への人びとの欲望が関わっている。言い換えると、文化的な価値が関与しており、文化という要因は、市場経済が固有に人びとの心理にもたらす欲望を普遍的な欲望として実感させる効果を持つものであり、そこにはある種の謎が含まれている。同様に、この使用価値を生み出す労働は、市場経済の商品の価値の実体として評価されるときには、実際に要した労働時間がそのまま評価されずに、市場での売買を通じて再帰的に評価される。マルクスはこのことを自覚しているが、時に議論の単純化のためにこの価値の再帰性という観点を無視あるいは軽視してしまうことがある

^{*2} Fantasmagorie、17世紀から18世紀にフランスで流行った幻灯機を使った幽霊あるいは亡霊の見せ物。

^{*3} たたとえば、神とか天国、地獄といった観念をここでは指している

べての人びとが抱く当然の感情に付随するフェティシズムはほとんど気づかれぬままとなる。

マルクスは、このフェティシズム論で、人びとが市場経済だけを前提して経済を分析したのでは、その特異な社会関係が必ずしも明確にならないと考えて、非市場経済のいくつかのモデル（自給自足のロビンソン・クルーソーの世界や、家族経済などの共同体の経済など）に言及しながら、市場経済の特異性を指摘している。ここでは、これらに深く言及する余裕はないが、マルクスは晩年になるにつれて、高度に発達した市場経済だけでなく未開社会の経済など人類学の成果を取り入れるような研究へと踏み込んでいる。これは、市場経済が、同時に、その周辺に大量の非市場経済をもち、地球上の多くの人びとが、非市場経済から市場経済へと移行するか、あるいは植民地のように市場経済に従属的に統合されるなど、さまざまな変動を被っていることに深い関心を寄せるようになったからだと思われる。こうした、非市場経済から市場経済への転換は、同時にその社会で暮らす人びとの経済との関わりや労働生産物が商品形態をまとうようになることを意味している。労働生産物が商品形態をとり、市場での売買が普及するにつれて、商品-貨幣のフェティシズムは一般化し、同時に、人びとの欲望も変容する。

さて、フェティシズムは商品においても見出せるが、それがもっとも端的に、しかも時には人びとの意識においても「異常」かもしれない心理として、自覚される場合が貨幣には見出せる。貨幣を前にして陶酔する守銭奴、という図式はありがちな光景である。金属や紙切れに、ただならぬ欲望を抱く。こうした金属や紙切れにあたかもそれ本来の無限の富を約束するかのような性質があると錯覚して頼りすぎる光景はフェティシズムそのものといえる。しかし、こうした性格は貨幣だけでなく、私たちが日常的に接することにならざるをえない商品そのものにも付随しているのだ、ということを忘れてはならない。

4.3 貨幣の諸機能

4.3.1 価格と価値尺度

商品売買と価格の実現 金貨幣の最初の機能は、商品の価格表示の単位となり、商品を購入する手段となる、ということである。

金の最初の機能は、商品世界にたいして価値表現の材料を提供すること、あるいは複数の商品価値を同分母の大きさとして、質的に同等で量的に比較可能な大きさとして表現することにある。こうして金は諸価値の一般的尺度として機能するのである。この機能を通してのみ、金という特別の等価商品はまず貨幣になる。

マルクスの価値尺度の定義は、商品の価格表示がそのまま価値尺度であるとみなす傾向があるが、店頭に並んだ商品に値札をつけたからといって、その商品が実際に購買されなければ、商品としての役割をはたしたことはない。買い手が購買することによって、商品の価格表示の妥当性が聖人されると考えるべきだろう。^{*4}

以前述べたように、商品貨幣説では、まず最初に、金という物質が貨幣としての機能（一般的等価物）をもつという前提を置いて貨幣の機能を説明する。商品と金の交換は、どちらにも社会的に必要な労働量が同量投下されていることによって、この交換が一定の水準を保つことになる。このことが、市場の商品流通に一定の秩序をもたらすことになり、同時に、市場の変動を抑制する作用をもたらす。これは、市場が労働と密接に関わり、交換と労働（生産）が相互に影響しあうもっともわかりやすいモデルである。同時に、このような金を

^{*4} 価値尺度を、商品を購入することによる価格の実現であるという点を明確にしたのは、宇野弘蔵である。

貨幣として市場経済が成り立ってきた歴史的な背景も踏まえることによって、分析者の単なる観念論的で便宜的なモデルではなくて、現実的な根拠を持つモデルとしての意義をもつことになる。^{*5}

商品の価値の大きさを実体として支えているのは、この商品の生産に投入されたと社会が認める労働量の大きさである。だから、本来であれば、労働量が価値の大きさとしてそのまま表示可能であればよいのだが、市場経済では労働量をそのまま表示するメカニズムがない。労働量に代替するものとして、商品の価値を相互に比較しうる物として、金がその代役を務める。

金 = 貨幣は、どの商品とも交換可能な機能（一般的等価物）を与えられており、貨幣さえ手に入れられれば、自分が必要とする商品を市場で入手することが可能になる。こうなることで、商品の交換は物々交換に比べて格段の効率性を獲得する。商品所有者は、この貨幣の取得を目的として、自己の所有する商品の交換価値を金の一定量で表示する。この金量の表示が価格と呼ばれることになり、同時に、価格の単位は、物の重量単位（グラムとかキログラムなど）とは別の固有の呼称によって、商品の交換価値を表記する単位であることが明確になる。

とはいえ、このような交換の効率性が貨幣によってもたらされたからといって、このことがただちに価値の実体をなす社会的労働の量をそのまま体現できるわけではない。だから、貨幣による商品の価値尺度 = 商品に投下されている労働量となる保証はどこにもない。市場経済が抱える本源的な限界と問題はここにある、社会が必要とする生産物を供給するには、その商品の生産に要する労働が的確に投じられなければならないのだが、そのことを市場は明示的な情報として受けとって取引に反映させるような便利な仕組みをもっていない。市場では、個々人の欲望に基づく取引が存在するだけであり、人びとが第一に関心をもつのは、一般的等価物である貨幣の取得か、この貨幣と引きかえに獲得できる商品である。

社会全体が必要とする商品を A、B、C とし、その社会の構成員が投入することができる労働量を L とすると、L の労働をこの三つの商品の生産に割り振らなければならない。この配分は、市場でこれら三つの商品がどのように需要されるかを通じてその配分の適、不適が判断される。商品 A の価格が上昇しつづければ需要に供給が追いついていないことを示し、商品 A の生産に労働がより多く振り向けられ、逆に B、C の商品の両方か一方の生産は減ることになる。社会が何をどれだけ必要とするのかを市場は価格の変動を通じて示すことによって、市場の背後の労働の配分を調整しようとする。こうした労働の配分を調整することを通じて、商品の価値が尺度される。このように、労働と市場での交換との関係が経済全体にとって重要な意味をもつことを前提としたばあい、金貨幣のように実物として労働量が対象化されている物が貨幣としての機能を果たしている場合と、紙幣や記号のように、それ自体には表示されている価格にみあう実体としての労働が含まれていないものが交換を媒介する場合とでは、経済全体の調整で少なからぬ影響があると考えなければならない。

商品価値の尺度は自然科学の物質の計測とは違う 自然科学的な意味で、物体の重量を測るという場合は、その物体に内在している質量を秤にかけて計測することだから、測ることによって物体の重量が変化することはない。しかし、商品の価値尺度はそうではない。測ることを通じて価値は変化するのである。市場で商品の価値が尺度されるということは、商品につけられた価格表示に対して、買い手が「その価格なら買ってほしい」とか「安いから買う」とか「明日になればもっと高くなるだろうから今日中に買おう」など、さまざまな将来の価格変動の予測（主観的経験的判断であって、客観的な根拠があるわけではない）をふまえて買うか買わないかを決める。市場に大量に供給される同種の商品がさまざまな売り手が様々な価格を設定し、買い手によって様々な価格で買われることを通じて、この商品の供給量の適否が評価される。供給の評価とは、供給を

^{*5} しかし、以下で述べるように、この金 = 貨幣のモデルは市場の拡大と流通の効率化のなかで限界を迎え、貴金属に代替する鑄造貨幣や紙幣に取って代わられるようになる。

支える労働の配分の適否が評価されるということである。供給の増減は、個々の供給者（生産者）の個人的な判断によるから、皆が一斉に同じ行動をとるわけではない。したがって、価格の変化が示す需要の変化に対して、供給が適切な状態を実現すること（需要と供給の一致）はむしろ偶然である。

もし、市場経済が、いっさいの労働による裏付けをもたない商品の取引であるという場合、言い換えれば、市場の取引が貨幣所有者による欲望のみによって左右される仕組みである場合、市場経済は、ほとんど社会にとって有意義な機能を果たすことはできない。市場経済では、だれもが、貨幣を獲得したが、貨幣を獲得できるように商品を売り込む。商品はもっぱら買い手の「欲しい、買いたい」という欲望を刺激するだけで、この欲望を調整する機能がいっさいないとすれば、市場は社会の必要を満たすのではなく、市場経済に固有の貨幣の欲望に支配されて無限の欲望の海に人びとの生活を投げ入れていしまう。労働による調整は、こうした市場の欲望の暴走をその社会において可能な労働の範囲に押しとどめることでかろうじて調整する。言い換えれば、もっと欲しい、もっと貨幣があればもっと自分が欲しいものが手に入る、という欲望に対して、「いや、そうはいつでも、社会が提供できる労働には限りがあり、社会全体で人びとが必要としているものを過不足なく提供できなければ、経済はその本来の機能を果たせなくなる」というシグナルを発する。このシグナルは一つではない。あるときは供給不足として、ある時は、貨幣の不足として、人びとに実感されるような事態を通じて人びとは欲望を断念するように強いられる。市場経済はある意味で残酷な経済である。貨幣によって人びとは無限の欲望を達成できる可能性を示唆されるが、決してこの無限の欲望を満たすに足りる貨幣を手に入れることはできない。欲望の地獄のなかで、人びとは「豊かさ」を夢見るだけとなる。マルクスが『資本論』冒頭で、資本主義社会の富は「巨大な商品の集合体」として現れると書いていたが、このような富は、必ずしも人びとが手に入れられる富を意味しているわけではない、ということなのである。

4.3.2 流通手段

商品売買の媒介 貨幣は商品売買を繰り返し媒介する。ある特定の貨幣に注目してみよう。この貨幣に印しをつけて、その流れを追ってみると仮定すると、貨幣は様々な商品売買を次々に媒介することがわかる。商品売買は、商品の供給と需要であり、貨幣は、社会が必要とするさまざまなモノの生産と消費を結びつける機能を果たすということになる。商品は売買を通じて、生産（供給）から消費（需要）へと移動して市場から姿を消すが、貨幣は市場に残って次々と商品の需給を媒介する。マルクスはこうした市場における商品と貨幣の有り様を「社会的新陳代謝」という言葉を使って次のように説明している。

交換過程は商品を、それが非使用価値である持ち手から、それが使用価値である持ち手へと移転させる。そのかぎりでは、交換過程はひとつの社会的新陳代謝である。（略）ひとたび商品が使用価値として役立つ場所にいたると、商品は交換過程の場面から消費の場面へと入り込む。

商品の売買を媒介する貨幣の役割に着目したとき、貨幣の価値尺度の機能で論じたように、売り手と買い手の一対一の関係ではなく、少なくとも三者の関係を視野に入れる必要がある。以前からのマルクスの例（ちょっと馴染みのない例だが）をここでも紹介しよう。マルクスは、リネン20ヤールを2ポンド^{*6}で売る売り手を例示している。このリネンの売り手は、昔気質の男で、販売で得た貨幣で、家庭用聖書を購入する。

^{*6} 19世紀のイギリスで流通していた1ポンドを金貨をソヴリン金貨と呼ぶ。1ポンド金貨は重量7.9881g、直径22.05mm、金品位91.67%。19世紀を通じて世界の基軸通貨だった。当時のイギリスの通貨単位は、ポンド、シリング、ペンスであり、1ポンド=20シリング。1シリング=12ペンスという変則的な換算になる。この世紀半ばのイギリスの労働者の年収は約50ポンドと言われているので、1ポンドの金貨は日常生活の買い物に使用するには高価すぎるため、労働者階級の間で日常的に流通するような貨幣ではなかったと思われる。

「聖書は使用対象として職工の家に入り込み、そこで徳を高める欲望をみたくことになる」。

リネン職工が取引の最終結果を吟味してみるならば、彼はリネンの代わりに聖書を、彼の元の商品の代わりに、同じ価値をもつが異なる有用性をもつ別の商品を手に入れている。これと同じやり方で彼は自分のために他の生活手段と生産手段を入手する。彼の観点から見れば、この過程全体は、彼の労働生産物と他人の労働生産物との交換、すなわち生産物交換を媒介するだけである。

変動と調整 このように、自己の商品を売って得た貨幣で自己の必要な商品を購入する過程を、次のように表現する。

W - G - W'

ここでの W は、商品を、G は貨幣を表す記号である。最後の W' は商品であるが最初の商品とは異なるので「ダッシュ」をつけておく。この最初の販売は、売り手にとっては、売れるかどうかかわからない不確実でリスクを伴う過程である。他方で後半の購買は、貨幣所有者としてこうしたリスクは負わない。この私たちが常に経験している市場の取引をマルクスは次のように述べている。

商品は何によりもまず貨幣の持ち主にとっての使用価値でなくてはならない。だからこの商品に支出された労働は、社会的に有用な形態で支出されていなくてはならない。あるいは社会的分業のメンバーであるという資格を実証しなければならない。(略) ことによると商品は、新しく登場した欲望を充足させようとする、あるいは独力で欲望を呼び起こそうとする新しい労働様式の生産物であるかもしれない。昨日までは同じ商品生産者の多くの機能のなかのひとつの機能であった特殊な労働業務は、今日になればことによるとこの連関から切り離されて自立化し、まさにそれゆえにその部分生産物を自立した商品として市場に送り出すかもしれない。このような分離過程にとっては、事情が熟していることもあれば熟していないこともある。生産物は、今日は社会的な欲望を充足させるとしても、明日になればことによると類似した別の種類の生産物によって、全面的であれ部分的であれ、その場所から追い立てられるかもしれない。われらのリネン職工の労働がそうであるように、(中略)彼の20エレのリネンの使用価値が保証されるわけではまったくない。リネンに対する社会的欲望が他のすべての欲望と同様に限度がある以上競争相手のリネン職工によってすでに充足されてしまっているときには、われらの友人の生産物は過剰となり余計なものとなり、またそれゆえに無用なものになってしまう。

商品売買の連鎖は、単純な事柄ではない。新製品が登場し、買い手の欲望も様々に刺激される。同じ商品であっても複数の売り手の競争があり、自分の商品は売れ残るかもしれない。次々に登場する新製品や競争相手に対して、買い手の貨幣の総額が対応するかどうかもわからない。こうした市場の変動をシグナルとして、生産も増減し、あらたな分業も起こる(技術革新といってもいいかもしれない)。商品の流通とこれを媒介する貨幣の関係は、変化の連続であり、調整の連続だが、機械を最適な状態に保つように調整するのは違って、最適な調整を実現することはできない。なぜなら、誰も何が最適な状態なのかを知らないからだ。マルクスはこのことをやや難解な言い回しで次のように述べている。

商品に内在する使用価値と価値との対立、私的労働が同時に直接に社会的労働として表現されるといふ矛盾、物象の人格化と人格の物象化の矛盾—これらの内在的矛盾は、商品転身の数々の対立のなかでその発展した運動形態を獲得する。だからこれらの形態は恐慌の可能性を、とはいえあくまで可能性にすぎないが、含んでいる。

恐慌とは経済システムの全般的な破綻である。商品は売れず、生産が継続しない。売れなければ販売によって得た貨幣を得ることができず、市場の貨幣は大幅に減少する。こうした可能性を市場は排除できない。ただし、このような恐慌と呼びうる大きな経済破綻は市場の流通だけでは起きない。生産もまた市場経済に統合され、資本が生産と流通全体を支配するような状況のなかで起きることになる。(この問題は後の課題である)

流通貨幣量 商品流通を媒介する貨幣について、もう一つの大きな問題は、どれだけの貨幣が市場では必要とされるのか、という通貨量の問題である。この通貨量をもっとも単純な図式で示すと次のようになる。

商品の価格総額 ÷ 貨幣の流通回数 = 流通手段として機能する貨幣の量

分母の貨幣は正確には「同名の貨幣片」を指す。市場に商品総額で100万円あり、これが一日で100回の取引で買い手の手に渡る場合は、貨幣は1万円あればよいということになる。もし50回であれば、2万円必要になる。「どの期間でも流通手段として機能する貨幣の総量は、一方では流通する商品世界の価格総額によって決められ、他方では商品世界の対立する流通過程の流れの緩急によって決まる」ということであり、販売が思うように増えないからといって流通貨幣量だけを増加させることは意味がなく、流通回数が一定のまま流通貨幣量をふやしても価格が名目上上昇する(インフレーション)だけで社会全体として商品の供給が増えるとは限らない。生産の供給を増やすためには別の努力が必要となる。

鑄貨、価値記号 先に述べたように、貨幣を金貨としたばあい、日常生活に必要な小額の売買にはなじまない。そこで、商品流通が日常生活の売買にまで浸透するような市場経済の拡大に応じて、金貨幣ではなく、より小額の取引に都合のよい金属(銀や銅など)や紙の貨幣が国家の保証のもとで強制通用力が保証されて(法に基づく流通の国家保証)流通するようになる。金貨幣は、それ自体が金(商品金としての)価値をもつので、国外においても通用するが、鑄貨や紙幣は国内でしか通用しない。

紙幣は金の記号または貨幣の記号である。商品価値に対する紙幣の関係は商品価値が紙幣によって象徴的に感覚的に表現される同じ金量のなかに観念的に表現される、という点につける。紙幣は、他のすべての商品量と同様に価値量である金量を代表する限りでのみ、価値の記号である。

紙に金と同等の価値が内在しているわけではない。しかし、「この紙切れを持参すれば、額面の金との交換を保証する」という保証を国家が与え、実際に保証が可能なだけの金の裏付けを国家が保有すること(保有していると一般に信じられることでもよい)によって、紙幣は金を代理するが、こうした保証が疑われると、その通用力を失い、紙幣の所有者は実物の金貨幣(あるいは金の地金)を要求するようになる。これは、経済危機のひとつの兆候である。

紙による金貨幣に代替する一般的等価物(市場で何とでも交換可能なもの)には、国家が保証を与えた国家紙幣の他に、中央銀行券がある。この両者はその出自が異なっており、両者を混同すべきではないのだが、流通において、商品との交換可能性という機能に限って言えば、この両者に違いはない。

貨幣を一方の手から他方の手へと遠ざける過程にあつては、貨幣を代理する単なる象徴でも十分にまにあう。貨幣の機能上の在り方が、いわばその物質的な在り方を吸収するのである。貨幣は商品価格の一時的に客観化された反射であるから、それは自分自身の記号としてだけ機能するのであり、だからこそ種々の記号によって代替されることもできる。ただし、貨幣を代理する諸記号は、それ自身の客観的に社会的な妥当性を必要としており、紙幣はこの妥当性を国家による強制通用によって受けとる。ひとつの共同体の境界によって囲まれた、すなわち国内的な、流通領域の内部でのみ、この国家強制は通用し、この境界内でのみ貨幣は流通手段または鑄貨としての機能のなかに解消する。したがってここで

だけは貨幣は紙幣の姿において、自分の金属実質から外面的に分離された、単なる機能的存在様式をとることができる。

4.3.3 貨幣としての貨幣

これまでの貨幣の機能は、商品流通の領域で商品売買を媒介するものだった。以下で述べる貨幣の機能は、流通の外で、あるいは流通の内と外を出たり入ったりすることを通じて貨幣が果たすいくつかの機能に関するものである。

退蔵貨幣 流通の外部で用いられる貨幣の機能のうち、もっとも私たちに馴染みのある機能が、富の蓄積手段としての貨幣である。こうした貨幣の機能を退蔵貨幣と呼ぶ。この退蔵貨幣は、単純な富の蓄積手段である場合もあれば、売買の過程で、次の購買のために多額の貨幣を蓄積しなければならないような場合にも生じる。(リネンの売り手が、家を購入するために貨幣を貯め込むなど)あるいは、あらたな事業を起こすために一定規模の貨幣を蓄積しなければならないといった場合に、富を蓄積する手段としての貨幣は退蔵貨幣として機能するということになる。

こうした貨幣の富としての蓄積の機能は、さらに、何かある使用価値を獲得する手段としての退蔵というだけでなく、貨幣という富を蓄積することを自己目的とする退蔵も生み出す。「富の絶対的に社会的な形態である貨幣の威力」を入びとが内面化する。同時に、こうした「貨幣の威力」は、この貨幣を所有する人の「私的人格の私的威力」となって、市場経済のなかで、こうした貨幣の威力を持つ者に、特殊な社会的な影響力(権威である場合もあれば、具体的な物理的な力に転化しうるような力)を与えるようになる。こうして、入びとの欲望は、より多くの多様な商品をますます多くの貨幣によって獲得したいという欲望だけでなく、貨幣という量的に無限の欲望へと向かう傾向を持つようになる。入びとの欲望は、使用価値への欲望と貨幣への欲望の間である種の矛盾を常に抱え込む。使用価値を獲得しようとするれば、貨幣を手放さなければならず、貨幣を貯め込むためには商品への欲望を断念しなければならない。この矛盾を解決するために、入びとはより多くの商品売るか、より高く商品売ろうとする。多く売り、少なく買うというある種の儉約の道徳も発展する。

支払い手段 支払い手段という名称は、購買手段(価値尺度)としての貨幣の機能とまぎらわしいし、日常用語としても購買手段とほぼ同義で用いられるが、購買手段とははっきりと異なる定義が与えられている。支払い手段とは、商品の購買以外の目的で支出される貨幣の機能を意味する。なかでも重要な支払い手段として、年金や医療などの公的保険料や税金の支払い(法に基づく国家の徴税権)や国家による様々な給付金、補助金の支払いといった国家の経済機能の一部は支払い手段に依存する。たとえば、国立大学は、独立行政法人であるが、政府の大学運営費交付金によって経費の多くをまかなっている。学生からの授業料は、教育サービスという商品の対価だから、授業料に用いられる貨幣は購買手段である。授業料は教育サービスの対価の支払いであるが、全額をカバーしない。医療の場合も、患者による医療費と保険からの給付によって医療サービス全体がカバーされる。逆に、消費税のように、商品の購買と租税の支払いが一体となる場合もある。消費者(買い手)は、税の支払いを拒否すれば商品の購入そのものもできない。理論的には、商品の購買のために支出された貨幣と消費税のために支出された貨幣とは区別可能だが、購買手段としての貨幣の機能が発揮可能となるには、消費税分を支払わなければならない。価格が100円の商品を購入するのに100円では不可能であって、105円を支出しなければならない。購買手段としての貨幣の機能は、こうした消費税の場合には、一定の制約を受けることになる。

もうひとつの重要な支払い手段の機能は、債務支払いである。^{*7}たとえば、貨幣の貸借で支出される貨幣は支払い手段となる。クレジットで商品を購入する場合も、クレジットの支払いは、商品の価格の代金の支払いであり購買貨幣の機能のようにみえるが、そうではない。クレジットでの買い物の場合、クレジットカード会社が商品の代金を売り手に支払う。その後は、買い手とクレジットカード会社との間での金銭の貸借関係が残ることになり、この借金の支払いとしてクレジットカード会社に支払うことになり、このようなクレジットの支払いは「支払い手段」としての貨幣の機能によると考えるべきなのである。

世界貨幣 8頁の引用にあるように、市場は国家ごとに国内市場としての一定の領域をもつ。商品流通の世界では、国家が流通を保証する紙幣や鋳貨が主要な流通手段となり、貨幣は「国民通貨」として、国家ごとに貨幣の名称を付与され、国内流通を保証される。この意味で、市場経済は国家による法的な貨幣の強制通用力に深く依存している。

市場経済を世界規模でみたとき、こうした国家ごとに形成された市場が複数存在し、それらの間での交易（貿易）は、国内市場の取引にはない固有の困難をもつことになる。その最大の困難は、国内でしか流通しない貨幣によって設定された価格を相互に共通の尺度で再度調整しなければならない点にある。

各国通貨に対して、どこの国でも、金が貨幣として通用する体制のばあいは、貿易においては金を決済手段として用いることができた。こうした貿易の体制が長らく続いたが、金が貨幣としての機能をもたなくなった現在では、どこの国でも貨幣として流通することができるような機能をもち、金のようにそれ自体が物質として生産に労働が投じられているような世界規模での一般的等価物としての貨幣は存在せず、一国レベルでの貨幣が併存することになる。このような不完全な一般的等価物の併存状態は、各国通貨相互の交換の比率をそれぞれの交易で取引される商品に投下された労働量を基礎にした市場の評価のシステムが働かない。

しかも、通貨相互の交換比率は、通貨の需給関係にも影響される。この需給関係は、純粋に市場経済のメカニズムだけでは決まらない。国際関係は、同時に、国家と国家の関係でもあるために、政治の関係を含む。政府の対外的な政策や安全保障政策や財政、通貨政策など一連の政治過程を考慮しなければならない。この意味で、国際的な経済関係は、資本の対外的な取引（貿易）と政治的な国際関係の不可分な構造として存在するために、純粋な市場経済というものを想定することはできない。

金貨幣の限界と市場経済の不安定性 紙幣や記号としての貨幣が国内流通を支配するようになるにつれて、金貨幣は市場から姿を消すようになる。とはいえ、国際貿易の取引の重要な局面で金貨幣は決済手段としての役割を果たしてきた。1970年代初頭までは、国際的な取引では金貨幣が一定程度の機能をはたしてきた。しかし、市場経済が国際的にも拡大するなかで、金という実物に通貨量が縛られることが、市場の拡大の制約要因になるにつれて、金の制約を取り払い、無条件の通貨発行を可能にする条件が必要となった。現状の市場規模は、もはや金量によって裏付けをもつような規模を大きく超えている。

国内流通でいえば1世紀にわたってすでに金貨幣は重要な役割をはたしておらず、世界市場でも四半世紀を超えて、金は貨幣としての役割を担っていない。にもかかわらず、資本主義的な市場経済は存続し続けてきた。このような歴史的な事実を踏まえたとき、それでもなお商品貨幣説を採用し、金貨幣によって貨幣の機能を説明することは、どこまで妥当なのだろうか？

商品貨幣説は、貨幣の本質を理解する上で、理論的な意義をもつ。しかし、市場経済の拡大と深化を通じて、貨幣の機能を支えてきた「金」という実物が市場経済の規模との関係で制約となり、これを市場経済は、金量に合わせて市場の拡張や規模を調整するのではなく、金を排除することで市場の拡張の制約を解除する方

^{*7} この他、寄付金、子どもの小遣い、賄賂など、一方的な貨幣的富の移転が支払い手段となる。

向をとった。金にかえて、貨幣量の調整はもっぱら国家（あるいは中央銀行）に委ねられることになった。

市場経済であれどのような経済であれ、経済は、人びとの労働なしには成り立たないが、現代の市場経済はこの労働との関係を調整するメカニズムを必ずしも十分にもっているとはいえない。むしろ市場経済は、労働による調整という根源的な経済の機能を十分に反映できず、労働と連動しない貨幣（通貨）に対する無限の量的欲望に左右されやすい環境に陥りやすくなっている。国家が市場を調整できるとは限らないにもかかわらず、国家以外に市場を全体として規制できるような強制力をもつ機関は他には存在しない。しかも国際市場については、国家のような統一的な調整の機関は存在しない。市場は、自己調整的ではなく国家のような調整機構を必要とするにもかかわらず、市場の規模はもはや個々の国家によって規制できるような規模を超えている。

市場経済は、近代資本主義になって始めて経済の中枢をになう存在になったが、同時に、このことは、国家のような社会を統治する政治機構を必要としてきたのだが、この国家の調整を超えるほどの規模へと拡大してしまった市場は、逆にその結果として極めて不安定な状態に自ら陥ってしまったともいえる。